

“農業の調査明るい明日があり”

2月1日は、農業基本調査が、全県一斉に、6千余人の調査員を動員して行なわれる。この調査は、農業に関する基本的事項を、毎年調査して、県の農業行政施策に基礎資料を提供しようというもの、農業問題が、うんぬんされている折、農業に関する基本的な農家数、農家人口、農業従事者、耕地面積等の基本的なものに、その時々を要求される項目などをとり入れて、県や市町村での農業施策などの資料として活用しようというものである。

“梅開く水戸から春がやつてきた”

寒い、寒いと思っているうちに、梅の噂がチラホラ、春の息吹は朝、夕の陽差に少しづつ、眼には見えないが、何んとなく春がきたというこの頃である。水戸九代藩主斉昭公が、衆と偕に親しむと、その名も偕楽園と名付けて127年の歴史と、伝統に輝やく数千の梅樹がポツポツと春のさきがけを感じさせる。2月20日から水戸の梅まつりを皮切りに、25日から第1観梅デーと春の序曲はかけ足でやつてきそうである。

“受験する子は梅の 香に無表情”

梅が咲き春の訪れとともに、受験シーズンでもある。今年の県立高校の入学願書がメ切られたが、平均競争率は1.24倍で、ほぼ昨年並みである。募集人員は23,910人で志願者は29,632人であるから5,722人が落ちることになる。出来るならば有名校と願う親心から、子供達の負担は仲々大変であろうし、県立校ならば学費も少なく済むことから受験勉強は、公立校を目指しこの寒夜にも受験の灯はいつまでも灯っているようだ。

“学費値上げ反対今年もストがあり”

物価の値上げは、私立学校にも及んで年々多額の学費が騰つていく、そんな中で毎年大学の学費

値上げ反対のストがマスコミを賑わす、早大、慶大、明大につづいて今年も芝浦工大、女子大や中央大学スト、結局、中央のストは学校当局が白紙撤回ということで無事収まったようだが、この物価高騰の中で学校経営という面から諸問題解決が、今後の課題となりそうである。

“日本の漁船が住めぬ日本海”

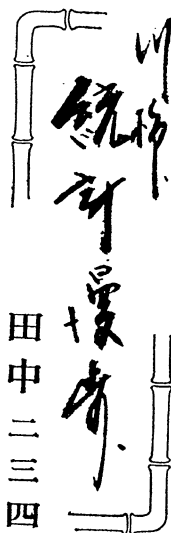
最近、日本海でわが国の漁船が、米国とか、ソ連或は韓国などの船団の出現のための悩まされているということをしき、四ツ島の周辺の海上は、いろいろの国際問題にからんで大きく時化てくるようだ。東郷元師の皇国興廃の一戦にありと、日本海海戦の勝利に輝やいた当時の日本海と今の日本海では様相が大きく変わってしまつて、地下の東郷元師も何んと思つていることやら。

“豪風雪一夜であれも これもマヒ”

2月15日から16日朝にかけ、表日本を襲つた低気圧のいたづらがもたらした雪は、九州から四国、東海道から関東にかけて最大瞬間風速15mの風をとめない各地に大きな被害を与えた。とくに被害の大きかつたのは、交通機関で、水戸でも5cmの雪のため15日夕刻からバスの時間が乱れ始め、多くの通勤者の足を奪つた。国鉄のダイヤも16日中はメチャクチャ、やつと17日になつてほぼ正常にもどつた始末、雪に対する無策ぶりを暴露した一幕であつた。

“節酒節煙値上げの時はそう思い”

今年も、いろいろな物価の値上は必至で、定期金や電話料、酒から煙草、水道料金や学費などからあらゆる物価が一斉に値上りそうである。こう物価がハネ上つてくると、お互に家計のやりくりも大変で、家計簿を預かる主婦の苦勞は並大底ではない。二百円亭主も、煙草や酒の値上りにつれて、昼飯代を含めての二百円では値上げ要求をしたいところ。この値上に便乗して煙草を止めようかなどと考えるのも、いつものことである。



(32)

ある新聞の文芸欄に「きさらぎやふりつむ雪を
まのあたり・万太郎」とあるように、2月はやはり雪の季節である。2月15日関東地方を襲った吹雪は送電線を切り、列車ダイヤを寸断し、空も陸も海も交通が止つた。翌日は地上のケガレを覆いかくすように、子供の頃深く親しんだ雪景色と同じ美観がそこにある。吹雪のあの夜半東京赤坂の歩道橋をはうように渡る私の脳裡に、ここにも軍塚が布陣したであろうと昭和11年2月26日の雪を想起した。早朝、齋藤内大臣・高橋蔵相・渡辺教育総監らを暗殺した昭和史上特筆すべきクーデター、いわゆる2・26事件である。当時中学生だった私にも非常なショックであり、その良否よりもこれは大変なことになったと直感したものである。ところが最近の世相のなかにもそれと同じような循環が感じられてならない。

今もつて国会は空転のまゝである。その原因は言石農相の日本海安全操業に関する思わぬ発言であり、次いで2月7日外務省牛場外務次官の沖縄施政権返還問題に関連しての発言が野党側からヤリ玉にあげられた。倉石さんは佐藤首相に、牛場さんは木村官房長官からそれぞれお目玉を丁戴したわけであるが、それらの言辭は巷のどこにも転ろがっている話題である。それを口にするようでは言攻をまかせられないのだそうである。実際こうした一連の成行をみていると、何かへんな気がしてならない。物いえばくちびる寒し秋の風とや

ら、ついつい本心を正直に打ちあげれば野党側からつるし上げられたり、叱かれたりする。そうそう、昔にこれに似た話しがあつた。京大の美濃部達吉博士や尾崎行雄が藪田某にやつつけられたのがそうであり、国会においては齋藤隆夫・西尾末広などという先生方が舌禍に問われたものである。当時の禁句は天皇と軍部への発言であり、それについて自由な発言をすると必ずやつつけられる。それにかわつて現代では平和憲法と核問題が1種のタブーらしい。自由と民主主義立国の日本では、誰もが、過去のいやな思い出を捨て、自由な時代を迎えたと思つたのであるが、そうでもないようである。いつでも三猿の訓へを厳守しなければならないとはやり切れないことである。時代のタブーに触れることを避け、片隅にひつそりと息づくような風潮は決して最良の策ではないであろう。したがつて、現代の若者たちは、こうした危険区域外において最近流行しているスクラップ音楽というものに興じている。いわゆる“帰つて来たヨツパライ”、…つまりオラは死んじまつたぞ…であり、「ケメ子の歌」がそれである。政治家は政治を忘れ、大学教授と学生は学問を忘れ、街を歩けば生命の危険にさらされ、家にもれば諸物価の上昇が家計を圧迫する。事象へのスクラップ化の要因が今や国内には充満している。こうした風潮が続くかぎりスクラップ音楽は永遠のメロディとして残ることだろう。